

---

マイペースな日常で。

ha4ba

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マイペースな日常で。

### 【Nコード】

N1467Y

### 【作者名】

h a 4 b a

### 【あらすじ】

いつも仲が良いと言われている二人の少年達。だが、そんな少年達は別々の道を歩む事になる。彼らは新しい生活で何を手に入れて生きていくのだろうか

## プロローグ（前書き）

以前短編小説で投稿した作品の連載ver.です！良かったら見て行って下さい！

## プロローグ

何も無い、誰も居ない、そんな場所で向かい合っている二人の少年達。

一人は剣を、もう一人も剣を所持している。

この戦いで負けた者には罰が待っている。

両者一步も譲れないこの戦いは、三時間の激闘と化していた。お互いの視線が重なる。

一人は大柄でガタイの良い少年。もう一人は普通の格好をした少年。そして、大柄の少年が動く。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおッ！！」

腕に力を込めて、ヒュンツ！！ とデカイ音が聞こえるほど早く振り回している。  
しかし。

普通の格好をした少年はそれを即座に避け、ガタイの良い少年に切り掛かる。

「ッ！！！」

ガタイの良い少年は予想外だと言わんばかりに、驚きの表情を隠せないでいた。

そして。

ビシュツ！！ と良い音が聞こえ、ドタンツ！！ と倒れこむ音が響いた。勝者はこの瞬間、決まった。

勝者は水崎嘉承みなさきかしょうと言う、普通の格好をした少年の方だった。

「クツソオ！ 負けちまったああああ！！ 何度目だあ！ これ  
何度目なんだああああ！！！」

コントローラーを頭にガンガンッ！ とぶつけるその少年は、先程からゲーム連敗中の黒井龍次くろいりゅうじと言う。

「単純に言ってる。お前が弱いだけだ」

お前相手じゃ飽きる、と言ってコントローラーを置くその少年は、先程からゲーム連勝中の水崎嘉承みなせきかじょうと言う。

二人共高校二年生で、お洒落をしない事で有名となっている。

だから両者共に特徴が無い。有ると言えば、黒井だけが持っているその面倒な性格だろう。

「ああ、何か叫んだらスッキリしたわ。さて……そろそろ行くこうぜ？」

「ああ。そうだな」

ゲームの電源を切って、テレビのリモコンを探している水崎に、黒井がリモコンを見つけて渡す。

「ほら、これだろ？」

水崎はリモコンを受け取って、テレビの電源を消す。

「お前にしちや気が利くな。その調子で今度俺にラーメン奢れ」

「何故にッ!？」

二階にある部屋から一階の玄関まで二人はゆっくり歩いて行く。

そして玄関の扉に手を掛けて、扉を開く。

「今、何時？」

時計を全然見ていなかった為か、時間が分からないので黒井に水崎が聞く。

「ちよい待ってなあ……7時45分だぜッ！」

「いちいち大きな声で言わなくても良いから……まあ良い。行くぞ」  
そして二人は路地に出る。

雲が一切無く、快晴と言える程の太陽の光が二人を襲う。

「やべえ……クソあちい」

早くも変な歩き方になっている黒井。

「そろそろ慣れるよ……って言っても俺も駄目だわ」

いきなりダウンしてしまいそうな二人だが、水崎はこのペースは遅

いと思い、少々ペースを上げた。

「なあ……ちよつと速いって」

「シロ……お前が遅いだけだ。もつと速く歩け」

シロとは水崎が付けた黒井の呼び名である。

そして黒井は水崎にクロと言う呼び名を付けた。

この二人の関係を表す意味らしいが、周りにはあんまり理解出来ていない。

「そんな事言ってもよ……暑さには人間は敵わないのだよ」

「お前のウザイ性格ならどんな暑さにだって負けねえよ。さっさと速く歩け」

面倒なやり取りをしたなと思いつつも、口角が上がっている水崎。

この二人は幼馴染であり、最も仲が良いと評判である。水崎はそれを認めていないが。

「へいへい……つてもう見えたじゃねえかつ!!」

「あ、気付かなかった」

二人の路地の先にはデカイ一つの建物。其処には二人と同じ服装の人間達が入って行っている。

「おかしいからね!? 気付かないとかホントおかしいからねツ!」

「シロ……落ち着け。無駄話してたから早く着いたんだ。別に良いだろ?」

「ああそうだな。早く着いたし、別に良いか!! って何でやねん!?!」

二人の声がデカイのか、沢山の視線が彼らに浴びせられる。

「ちよつと目立ちすぎだな。もう中に入るう」

「そうだな。クロ!! 早く入ろうぜ!」

そして二人は建物の中に入っていく。

沢山の人物が、相変わらず仲の良い二人、と呟いている。

しかし、そんな二人を見れるのもこれが最後、と呟く者も居た。

そう、今日は卒業式。

彼らが中学生を卒業する日である。

## プロローグ（後書き）

ご感想など有りましたらお願いします。そして誤字などの発見も有りましたらヨロシクお願いします！



## 第一話（前書き）

かなり文字数少ないですが、その辺りは御了承下さいませ。

## 第一話

その後、二人は卒業式に出席する。

長いようで短かった三年間。お世話になった校舎を拝め、先程受け取った卒業証書を見つめる。

（短かったな……三年間。ホントに終わりなんだよな）

そんな事を小さく呟いた水崎。ふと顔を上げると、卒業証書を受け取っている最中の黒井を見つけた。

古くからの付き合いって事もあり、緊張しているのが水崎にはバレバレだった。

（保育園で初めて俺とシロは会ったんだっけ……駄目だ。はっきり思い出せねえ）

黒井が緊張しつつも、ミスを犯さないよう卒業証書を受け取った事にホッとする水崎。

せめて卒業式くらいはしっかりやがれ、と言ってやりたい。

（そういえば……小学校中学校で同じクラスになったことは一回も無かったねえ……）

奇跡と言っても良いほどの運の悪さ。

クラス替えて一緒のクラスになった事は一度も無い。

それがこの二人だった。

最初は水崎も残念だったが、後々になってくると慣れていた為、全く気にしていなかった。

最も、黒井だけは残念な感じを露にしていたが。

そんな事を考えている内に、卒業式は進行している。

そして、こんな事も思った。

（最後の最後でシロとは別々の道を歩む事になるのか……寂しいモンだねえ）

水崎は普通に進学、つまり高校に行く。だが黒井は違った。

自分の夢を叶える為に、就職する事にしたらしいのだ。

親は当然反対した。それでも、黒井龍次は聞かなかった。

その夢について語れと両親は言ったらしいが、それを断固拒否した。結果、黒井の夢を知っている者は誰も居ない。

（俺も知りたかったんだけどな……まあ良い。親の承認も通った事だし、シロもシロらしく頑張るだろうな）

沢山の事を考えていた。気付いたら歌を歌い終えて、卒業式終了目前だった。

長いようで短かった三年間が、遂に終わる。

『、以上で卒業式を終了します。気を付け……礼』

黒井龍次。水崎嘉承。この二人の新しい物語はこれから始まる。

## 第一話（後書き）

ご感想など有りましたらお願いいたします。そして誤字などの発見も有りましたらヨロシクお願いいたします！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1467y/>

---

マイペースな日常で。

2011年11月3日03時13分発行